

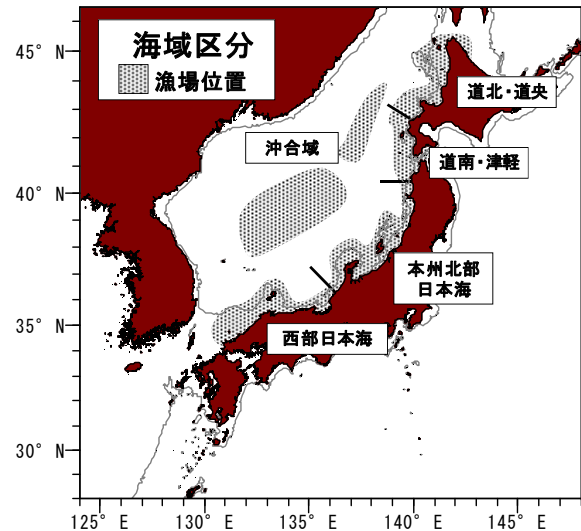


2019年度 第2回 日本海スルメイカ長期漁況予報

－ 別表の水産関係機関が検討し国立研究開発法人水産研究・教育機構
日本海区水産研究所がとりまとめた結果 －

今後の見通し(2019年8月～12月)のポイント

- ・今期の全体の来遊量は前年および近年平均を下回る。
- ・道央・道北では前年および近年平均を下回る。
- ・道南・津軽では前年並で近年平均を下回る。
- ・本州北部日本海および西部日本海では近年同様、漁場が形成されにくい。
- ・沖合域では前年および近年平均を下回る。漁場は、北海道西沖で8月～11月、大和堆周辺海域で11月～12月に形成される。



* 近年は最近5年間(2014年～2018年)

問い合わせ先

国立研究開発法人 水産研究・教育機構 日本海区水産研究所

担当：業務推進部 永澤、後藤

資源管理部 川端、宮原

電話：025-228-0451、ファックス：025-224-0950

当資料のホームページ掲載先URL

<http://www.fra.affrc.go.jp/pressrelease>

2019年度 第2回 日本海スルメイカ長期漁況予報

今後の見通し（2019年8月～12月）

対象魚種：スルメイカ

対象海域：日本海（道北・道央、道南・津軽、本州北部日本海、西部日本海、沖合域）

対象漁業：主にいか釣り・小型いか釣り漁業

対象魚群：主に秋季発生系群、後半は冬季発生系群も含む

1. 道北・道央（小型いか釣り）

- (1) 来遊量・漁況：今期の前半は前年および近年平均を下回る。
- (2) 漁期・漁場：8月までと10月～11月に来遊のピークがある。

2. 道南・津軽（小型いか釣り）

- (1) 来遊量・漁況：前年並で近年平均を下回る。
- (2) 漁期・漁場：8月までに来遊のピークがある。

3. 本州北部日本海（小型いか釣り）

- (1) 来遊量・漁況：前年並で近年平均を下回る。
- (2) 漁期・漁場：11月までは近年同様、漁場が形成されにくい。

4. 西部日本海（小型いか釣り）

- (1) 来遊量・漁況：前年並で近年平均を下回る。
- (2) 漁期・漁場：近年同様、漁場が形成されにくい。

5. 沖合域（いか釣り）

- (1) 来遊量・漁況：前年および近年平均を下回る。
- (2) 漁期・漁場：北海道西沖で8月～11月、大和堆周辺海域で11月～12月に漁場が形成される。

* 道北・道央（宗谷～後志）、道南・津軽（渡島、檜山、青森県）、本州北部日本海（秋田県～石川県）、西部日本海（福井県～長崎県）、沖合域（北海道西沖～大和堆周辺海域）。

* 近年平均は最近5年間（2014年～2018年）の平均、前年は2018年を示す。

I 予報の説明

2019年6月までの日本海沿岸各地の漁況の経過、6月中旬～7月上旬に実施した日本海スルメイカ漁場一斉調査の結果、冬季発生系群を主体とした太平洋側への来遊状況（2019年度 第1回 太平洋スルメイカ長期漁況予報）、および9月までの海況予報（2019年度 第2回 日本海海況予報）を情報として、今期の漁況を予測した。

1. 道北・道央（小型いか釣り）

【近年の漁況の特徴】 本海域では、近年、7月～8月と10月～11月に漁獲量のピークがある。前半は秋季発生系群が主対象であり、後半は夏季に日本海を北上した後、南下する群のほか、道東・オホーツク海から宗谷海峡を經由して来遊する冬季発生系群も漁獲対象となる。

【今期の情報と予報の説明】 日本海スルメイカ漁場一斉調査の結果では、本海域の分布量は前年および近年平均を下回り、分布は沿岸域に偏っていた。本海域における6月の漁獲量は、前年および近年平均を下回った。また、日本海スルメイカ漁場一斉調査において道南・津軽海域の分布量は前年および近年平均を下回った。以上のことから、今期前半の漁況は前年および近年平均を下回ると予測される。また、今期後半には冬季発生系群が漁獲の対象に加わるが、現時点では宗谷海峡からの来遊量に関する判断材料が揃わないため、予測ができない。

2. 道南・津軽（小型いか釣り）

【近年の漁況の特徴】 本海域では近年、6月～8月に漁獲量のピークがある。また、11月～12月には、夏季に日本海を北上した後、南下する群のほか、太平洋側から津軽海峡を經由して来遊する冬季発生系群を対象とした漁獲のピークができる場合がある。

【今期の情報と予報の説明】 日本海スルメイカ漁場一斉調査による本海域での分布量は前年および近年平均を下回った。本海域における6月の漁獲量は、不漁の前年並で近年平均を下回った。また、今期後半の本海域への来遊量に関係する太平洋側の9月までの来遊は、常磐～三陸海域および津軽海峡～道南太平洋海域で前年を下回り、道東太平洋海域で前年並に少ないと予測されている。以上のことから、今期の来遊は不漁の前年並で近年平均を下回ると予測される。

3. 本州北部日本海（小型いか釣り）

【近年の漁況の特徴】 本海域では、近年、5月～7月が漁期の中心で、8月～11月には好漁場が形成されない。12月の漁場形成には、海況の影響が大きいと考えられる。

【今期の情報と予報の説明】 日本海スルメイカ漁場一斉調査による本海域での分布量は前年を上回り、近年平均を下回った。本海域における5月～6月の漁獲量は前年を上回ったが、近年平均を下回った。また、日本海スルメイカ漁場一斉調査の全調査点の平均CPUE（後述）は前年および近年平均を下回った。これらの結果から今期の来遊は前年並で近年平均を下回ると予測される。漁場については7月までの漁場が8月まで継続する可能性もあるが、それ以降は近年同様に形成されにくいと予測される。なお、12月の漁況は沖合冷水の張り出しとの関係が大きく、現時点では来遊量を予測できない。

4. 西部日本海（小型いか釣り）

【近年の漁況の特徴】 本海域では10月以降に沖合から南下する群が漁獲の主対象となる。ただし、近年は10月～12月の南下群の来遊が少なく、漁場が形成されにくい。

【今期の情報と予報の説明】 日本海スルメイカ漁場一斉調査における本海域での分布量は前年および近年平均を上回った。一方で、日本海スルメイカ漁場一斉調査の全調査点の平均CPUE（後述）は前年および近年平均を下回った。以上の状況から、今期の来遊は前年並で近年平均を下回り、近年同様、漁場が形成されにくいと予測される。

5. 沖合域（いか釣り）

【近年の漁況の特徴】 沖合域では従来、6月～12月にかけて大和堆周辺海域に、水温の高い8月下旬～9月には北海道西沖にも漁場が形成されてきた。しかし、近年は漁場が北偏化し、8月～11月は主に北海道西沖に漁場が形成され、大和堆周辺海域では6月～7月および11月～12月に漁場が形成される年が多くなっている。

【今期の情報と予報の説明】 日本海スルメイカ漁場一斉調査の結果による本海域の分布量は、前年および近年平均を下回り、高密度の分布点は沿岸域に偏っていた。以上の状況から、今期の本海域への来遊量は前年および近年平均を下回ると予測される。漁期・漁場に関係する情報として、今期前半の表面水温は、「平年並み」と予測されており（2019年度第2回日本海海況予報^{*1, 2)}、7月5日発表）、近年同様、北海道西沖で8月～11月、大和堆周辺海域で11月～12月に漁場が形成されると予測される。

*1) <http://www.fra.affrc.go.jp/pressrelease/pr2019/20190705/index.html>

*2) 日本海海況予報における平年は1986年～2015年の平均値

II 予報に用いた主要な情報および調査結果

1. 日本海スルメイカ漁場一斉調査結果

日本海におけるスルメイカ秋季発生系群の分布状況を、いか釣りによる試験操業（6月中旬～7月上旬に実施）によって調べた（図1）。

1) 分布状況

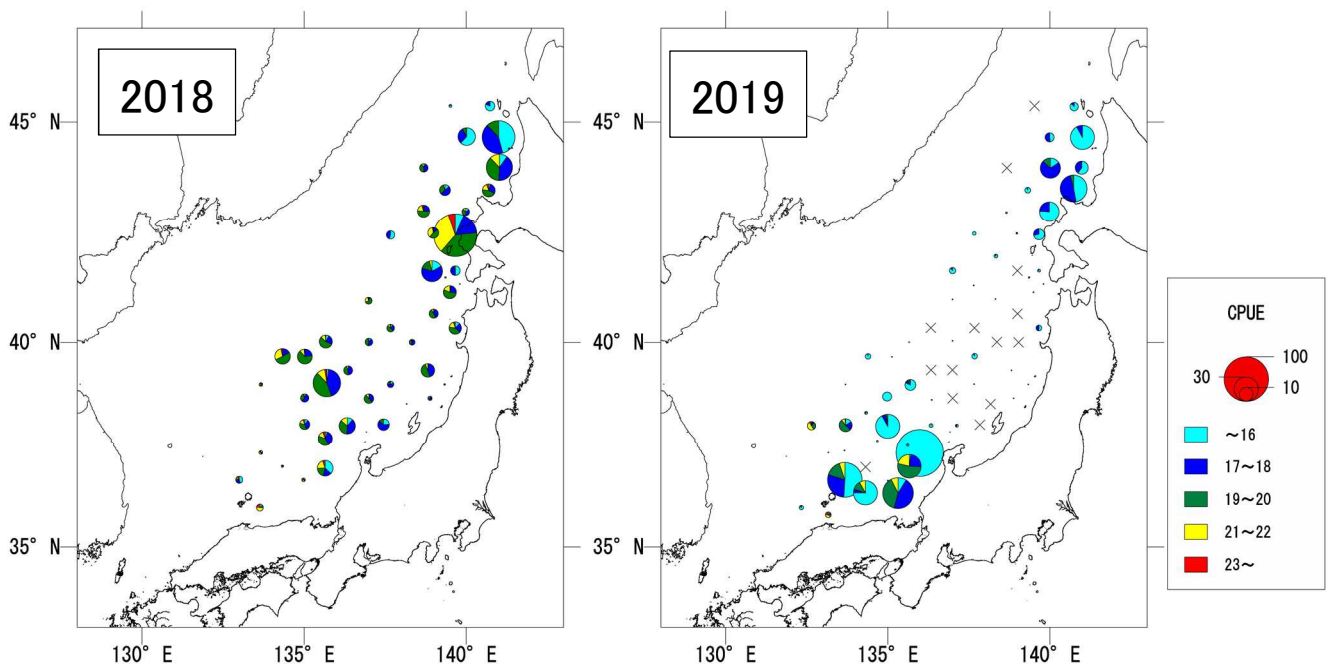


図1 日本海におけるスルメイカの分布状況（2018年と2019年の調査結果）

図中×は漁獲がなかった点を示し、●の面積は各調査点の分布密度の指標となるCPUE（釣機1台1時間あたりの採集尾数）を示す。また各色は各外套背長範囲(cm台)の比率を示す

- (1) 道北・道央海域では、外套背長14cm台～16cm台の個体を中心に採集された。分布密度の指標となるCPUE（釣機1台1時間あたりの採集尾数）の高い点は沿岸寄りにあり37尾が最大であった。また沖合の点では漁獲がない点もあった。
- (2) 道南・津軽海域では、外套背長14cm台～15cm台の個体を中心に採集された。CPUEは檜山沿岸の6尾が最大で、そのほかの点は1尾を下回り、また漁獲のない点もあった。
- (3) 本州北部日本海では、外套背長10cm台～11cm台と15cm台～16cm台の個体が主体であった。CPUEは能登半島西の点で113尾であったほかは2尾を下回り、漁獲のない点もあった。
- (4) 西部日本海では、外套背長は16cm台～17cm台の個体を中心に、より小型の12cm台～13cm台まで幅広いサイズの個体が採集された。また、例年、本海域でのCPUEは他海域より低い傾向にあるが、本年はやや沿岸よりの北緯36度～37度付近でCPUEの高い点が多く見られ、若狭湾沖の61尾が最大であった。一方で漁獲のない点もあった。
- (5) 沖合域では、外套背長10cm台～12cm台が主体で、17cm台～18cm台も採集されたが、近年の同海域の組成と比べると著しく小型に偏っていた。また例年、大和堆周辺海域におけるCPUEは本州沿岸域より高い傾向にあったが、本年はCPUEが低く、北緯38度0分、東経135度0分の点で最大の30尾であったほかは10尾を下回り、漁獲が

ない点もあった。

2) 日本海スルメイカ漁場一斉調査の全調査点の平均 CPUE

日本海スルメイカ漁場一斉調査の全調査点の平均CPUE（釣り機1台1時間あたりの採集尾数）を日本海への来遊量の目安として示した。日本海スルメイカ漁場一斉調査の平均CPUEは、1980年代には低かったが1990年代に上昇し、2000年～2002年には3年連続して20尾を越えた（図2）。2003年以降は概ね15尾前後で推移していたが、近年は低下傾向にある。2019年は7.40尾で、前年（10.16尾）を下回り、近年平均（15.31尾）の48%で、1990年以降で最低の値となった。また、隠岐～能登半島西部および北海道西部の沿岸においてCPUEの高い点が認められた一方で、漁獲のなかった点が調査を行った65点のうち14点（22%）と、これまでの調査（0～5%）と比べて多く見られ、高密度の点と低密度の点の差が大きかった。

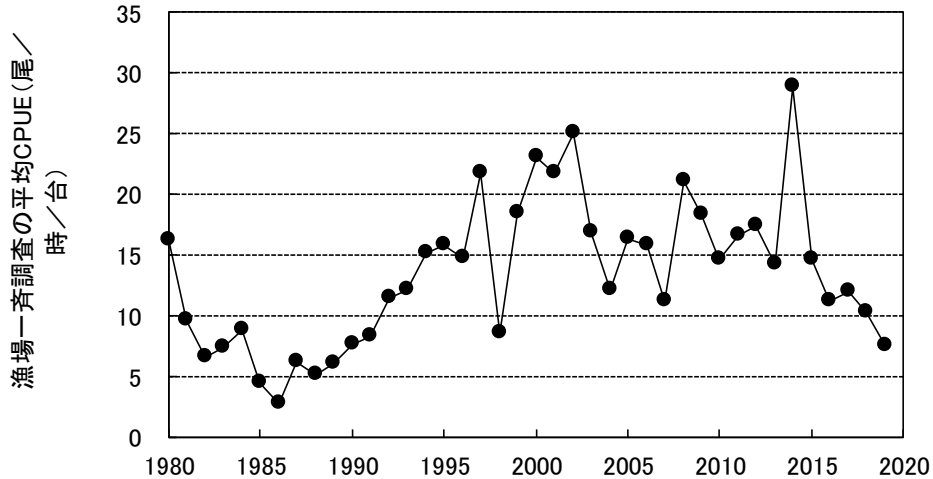


図2 日本海スルメイカ漁場一斉調査の全調査点の平均CPUE（釣り機1台1時間あたりの採集尾数）の推移

3) 魚体の大きさ

日本海スルメイカ漁場一斉調査の全調査点の平均CPUEで重み付けした外套背長組成を図3に示す。2019年は外套背長のモードは前年および近年平均より小さく、19cm台以下の個体で9割以上を占めていた。過去の日本海スルメイカ漁場一斉調査（1995年以降）において、外套背長組成のモードが最も小さかったのは2011年の16cm台であったが、本年のようにさらに小型の個体も多くみられるような組成の年はなかった。

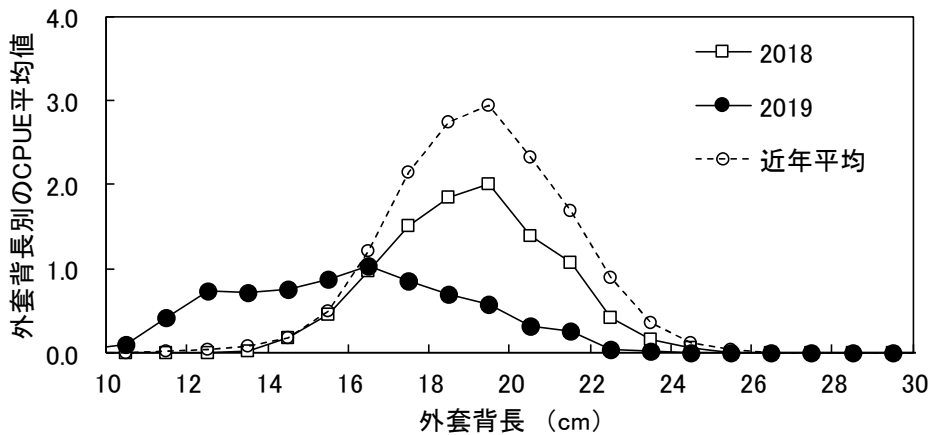


図3 日本海スルメイカ漁場一斉調査結果によるCPUE重み付け平均外套背長組成
各外套背長階級の値は釣り機1台1時間あたりの平均採集尾数を示す

2. 2019年6月までの日本海各海域の漁況の経過

2019年6月までの各海域の月別漁獲量を図4に示す。2019年の漁獲量（4海域合計）を月別に見ると、4月まで前年を下回り、5月以降は前年並となった。道北・道央の漁獲量は、例年通り6月から増加したが、大部分は道央で漁獲されており、前年および近年平均を下回った。道南・津軽での漁獲量も例年通り6月から増加したが、不漁の前年並で近年平均を下回った。本州北部日本海での漁獲量は、4月までは前年を下回り、5月～6月は前年を上回ったが、漁場は能登半島西岸に集中しており、新潟県以北では5月～6月の漁況は前年を下回った。西部日本海では、

5月まで近年平均を下回ったが、6月には前年および近年平均を上回った。

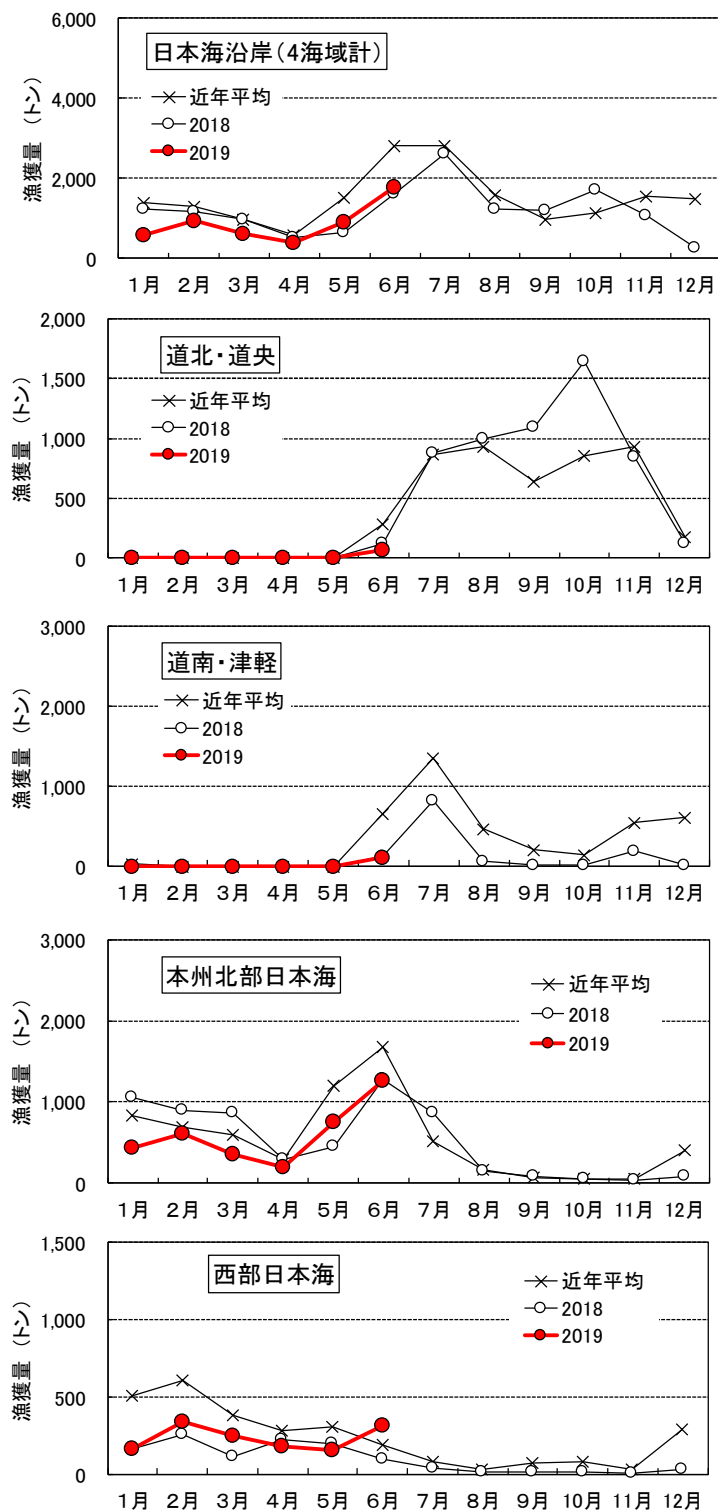


図4 日本海各海域の生鮮スルメイカの漁獲量（トン）
各道府県試験研究機関および漁業情報サービスセンターの資料より作成（一部未集計）

3. 太平洋側（冬季発生系群）の資源状況

太平洋側には主にスルメイカ冬季発生系群が分布する。これらは10月以降、宗谷海峡および津軽海峡を經由して日本海に来遊するため、太平洋側の漁況は10月以降の日本海の漁況に深く関係する。

2019年度第1回 太平洋スルメイカ長期漁況予報（7月25日発表）では、8月～9月の太平洋側への来遊は、常磐～三陸海域と津軽海峡～道南太平洋海域で前年を下回り、道東太平洋海域では前年並に少ないと予測されている。

参 画 機 関

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構 水産研究本部 中央水産試験場 函館水産試験場 稚内水産試験場	京都府農林水産技術センター 海洋センター
地方独立行政法人 青森県産業技術センター 水産総合研究所	兵庫県立農林水産技術総合センター 但馬水産技術センター
秋田県水産振興センター	鳥取県水産試験場
山形県水産試験場	島根県水産技術センター
新潟県水産海洋研究所	山口県水産研究センター
富山県農林水産総合技術センター 水産研究所	長崎県総合水産試験場
石川県水産総合センター	一般社団法人 漁業情報サービスセンター
福井県水産試験場	国立研究開発法人 水産研究・教育機構 北海道区水産研究所
	(取りまとめ機関) 国立研究開発法人 水産研究・教育機構 日本海区水産研究所